様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　７日現在

機関番号：８４２０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５２０５９４
研究課題名（和文）　日本中世における内水面の環境史的研究

研究課題名（英文）　Environmental Historical Research on Inland Waters in Medieval Japan

研究代表者
橋本　道範（HASHIMOTO MICHIMORI）
滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・主任学芸員
研究者番号：１０３４４３４２

研究成果の概要（和文）：本研究では、内水面の陸域と水域とが推移する環境（推移帯）の中世における広範な展開に注目し、そこにおいては網野善彦氏が強調したような特権的漁撈は貫徹しておらず、多様な主体による小規模で素朴な漁撈から大規模で高度な漁撈まで異質な漁撈が競合しつつも併存していたことを明らかにした。また、淡水魚介類等の首都京都での消費動向を解明し、京都における堅田産フナ属の需要の拡大と堅田漁撈の展開とが連関していた可能性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the transitional environment (ecotone) between land and water in the Middle Ages. As a result, I found that fishery with special privileges which Yoshihiko Amino emphasized was not so common, but various different types of fishery, from small-sized simple fishery to large-sized fishery with advanced techniques, coexisted and competed with each other. In addition, I also clarified how freshwater fish was eaten and exchanged as gifts in the capital Kyoto, and pointed out the possibility that expansion of demand for crucian carps caught by Katata fishermen in Kyoto was closely related to the development of Katata fishing port.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	900,000	270,000	1,170,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：歴史学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：中世史・環境史・内水面・琵琶湖・漁撈・消費・村落

１．研究開始当初の背景

(1)日本の戦後歴史学は、ながらく開発の進展による生産力の上昇を社会変革の要因に措定し、議論の前提としてきた。「自然の規定性」に注目した戸田芳実氏の議論も、克服される対象として自然を捉えたものであった。しかし、研究開始当初、特に日本中世史分野において、人間の自然への働きかけ（開発）ばかりではなく、自然の人間への影響をも含めて、自然と人間との双方向的な関係を解明しようとする「環境史」研究の重要性が主張されるようになっていた。

しかしながら、それまでの日本中世史における環境史研究は、人間の諸活動が営まれる

自然環境そのものの特質を捉える視点がいまだ弱いように見受けられた。また、近年では、「水辺」という空間概念で民俗学等の研究が大きく前進しているが、これらの研究は、主に水界の範囲が比較的固定化されるようになった近世以後を対象とした研究であり、水界の範囲が未だ固定化されていない中世については未開拓の研究領域が大きく広がっていた。

(2)日本列島最大の内水面、琵琶湖の中世漁撈は、網野善彦氏の非農業民論の主要な分析対象の一つである。そこにおいて網野氏は非農業民と自然との関係性が、「自然そのものの「論理」」に沿ったものであることを強調している。しかし、網野氏は、「自然そのものの「論理」」がいったいどのようなものであったのかについては説明していない。したがって、琵琶湖固有の自然のあり方そのものを軸とした研究が必要であると考えられた。

２．研究の目的

本研究は、日本列島の内水面の中世的特質を究明して、そこにおける漁撈を中心とした生業の実態と展開を解明し、その上で、そうした環境を管理する主体としての村落の歴史的意義を考察することを目的としたものである。具体的には、(1)内水面の環境の中世的特質の解明、(2)推移帯での多様な漁撈と禁漁の解明、(3)都市における淡水魚介類消費と漁撈との関係性の解明、(4)環境管理主体としての村落の歴史的意義の解明を行う。

(1)内水面の環境の中世的特質の解明

中世における内水面は、陸域と水域とが不定期な周期で可逆的に推移する空間、生態学的にエコトーン（以下、「推移帯」とする）とよばれる空間を含んでいた。こうした推移帯が、中世の人々にどのように認識され、史料上どのように登場するかを明らかにする。

(2)推移帯での多様な漁撈と禁漁の解明

上記推移帯において、関わる主体に特に注目しながら、その環境を利用して漁撈がどのように成り立っていたのかを明らかにする。また、寺辺の殺生禁断と漁撈との関わりについても検討する。

(3)都市における淡水魚介類消費と漁撈との関係性の解明

内水面で漁獲された淡水魚介類が都市でどのように消費されたのかを明らかにし、逆に都市消費と漁撈とがどのように関わっていたのかを明らかにする。

(4)環境管理主体としての村落の歴史的意義の解明

領主から荘民まで多様な主体が推移帯と関わる中で、村落がどのような機能を果たしていたのかを解明する。特に、重層的な構造を持つ中世村落のなかで、下位の共同体が果たした歴史的役割について考察を加える。

３．研究の方法

(1)内水面の環境の中世的特質の解明

これまでの災害史、特に洪水についての研究を参照しつつ、『平安遺文』データ・ベースなど、古文書、日記、文学作品などのデータ・ベースから「河成」・「河辺」・「河原」など推移帯に関わる用語を検索し、環境の特質について検討を加える。

(2)推移帯での多様な漁撈と禁漁の解明

漁撈については、これまで網野善彦氏や保立道久氏らが分析の対象としてきた琵琶湖等内水面漁撈の史料について、推移帯という視点からどのようなことが読み解けるか再検討を加える。

また、禁漁については、琵琶湖地域の石山寺（大津市）と長命寺（近江八幡市）に残る殺生禁断の史料を対象として、総合地球環境学研究所研究プロジェクト４－４「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」と連携して、ＧＩＳを用いて寺院からの視界を復元し、寺院からの視界と禁漁との関係について検討を加える。

(3)都市における淡水魚介類消費と漁撈との関係性の解明

琵琶湖博物館の総合研究「東アジアの中の琵琶湖：コイ科魚類の展開を軸とした環境史に関する研究」で作成した「中世魚介類データベース」を用いて、15 世紀にフナ属が都市でどのように消費されたのか、その実態を解明し、それが漁撈とどう連関していたのかを明らかにする。

(4)環境管理主体としての村落の歴史的意義の解明

日本列島の様々な主体による内水面漁撈関係史料を検索するとともに、琵琶湖地域の奥嶋（近江八幡市）に伝わった大嶋神社・奥津嶋神社文書、長命寺文書などから漁撈紛争に関する記事を検索し、そのなかで村落がどのように関わっているのかについて解明する。

また、琵琶湖地域との比較検討のため、吉井川下流域左岸（瀬戸内市）の史料を網羅的に検討し、中世村落の実態を検討する。

４．研究成果

(1)まず、環境史研究の可能性について、佐野静代氏の議論を検討するなかで、環境史研

究が歴史学を超えた諸学問分野との協業の装置として有効であり、自然を一方の軸とする新しい歴史観が構築される可能性があることを論じた。

(2)次に、中世には流動する河川や水位が変動する湖沼という水域の周辺に推移帯が広がっており、「河原」、「河辺」、「浜際」などと認識されていたと推定した。そして、そこでは網野善彦氏が主張する「海民」による特権的な漁撈は貫徹しておらず、地頭・御家人層や荘官層から荘園の住人等まで様々な階層による異質な漁撈が競合しつつも併存していたことを実証した。特に、「河原」や「河辺」でのその日の暮らしのための小規模で素朴な漁撈が行われていたことを明らかにしたことが重要であると考えている。また、飢饉の中でも魚鳥類は売買されており、小規模で素朴な漁撈であっても市場と結びついていた可能性についても論じた。

(3)次に、内水面には殺生禁断という領域（禁漁区）が広がっていたことに注意を促した。具体的には、石山寺と長命寺の殺生禁断を取り上げ、ＧＩＳを利用して寺院よりの視界を復元し、より視界が狭い石山寺では狭い範囲の瀬田川に限定して殺生禁断が行われ、より視界が広い長命寺では視界の見通せる南方域に限定して殺生禁断が行われていたとの仮説を提示した。

(4)次に、都市における魚介類消費に関する研究史整理を行った。これまで魚介類消費は、日本料理史という枠内で研究が行われているが、これは配膳様式変遷の歴史であり、干物・塩物・スシ・醤などの加工法が発達した古代・中世前期から、鮮魚を利用した鱠・煮物・汁物などの料理法が発達していく室町時代へという魚介類の調理技術の展開史のなかに位置づける必要があることを主張した。

(5)次に、中世前期の堅田漁撈に関する基礎史料である『賀茂御祖皇太神宮諸国神戸記』所収史料の紹介を行った。そして、貢納の実態、漁撈の保障、漁期と漁法について検討し、網野氏の想定とは異なり、中世前期の堅田漁撈が意外に脆弱であったと論じた。

(6)次に、フナ属の都市消費の実態解明と都市消費と漁撈との連関について考察を行った。その内容は下記のとおりである。
①橋本道範編『琵琶湖博物館研究調査報告第 25 号　日本中世魚介類消費の研究―一五世紀山科家の日記から―』の成果に基づき、15 世紀の貴族山科家の日記からフナ属の魚介類記事を抜き出し、グレゴリオ暦に換算した。その結果、フナズシはほぼ年間を通して贈答されていると同時に、5 月、6 月と 8 月という贈答のピークがあることが明らかになった。また、フナズシ以外のフナの贈答と貢納を分析した結果、産卵期（4 月～6 月）と厳寒期（12 月～2 月）という季節性をもっていたことが明らかになった。これにより産卵期の抱卵したフナが価値をもっていたことが確定的となった。

②中世の料理書にフナ属の料理として、膾、刺身、焼物、煮物、こごり、汁や吸物が登場することが明らかになった。これらのうち、包焼は 15 世紀には故実の世界の料理と考えてよく、フナ属の料理で最も重要な料理は膾料理と想定された。そして、鱠料理に欠かせない素材として登場するのが堅田鮒であり、堅田鮒は振り売りによって京都で直接販売されていたことを確認した。

③これまで堅田漁撈を理解する上で基本史料とされてきたのが、『菅浦文書』の応永 4 年（1397）の堅田契約状であるが、内容、形式ともに疑うべき点があり、これを基本に堅田漁撈を考えることはできないことが判明した。それに対し、年未詳の堅田と菅浦の紛争史料により、菅浦が排他的漁業権を主張する地先十八丁の「浦前」で、旧暦 3 月以降、堅田が夜な夜な網を打っていたことが確認できた。これは抱卵したフナ属をターゲットとしていたとみてよいと考える。これらにより、中世前期には脆弱であった堅田漁撈が、首都京都における堅田鮒の需要の増大を背景として、他浦地先での夜間漁撈を梃子に琵琶湖で台頭したとの見通しを示した。これらについては現在論文を投稿中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 橋本道範、(2010) 日本中世の魚介類消費と一五世紀の山科家、琵琶湖博物館研究調査報告、25、7-16、査読無

② 橋本道範、(2009)「環境史」研究の可能性について―佐野静代氏の業績の検討から―、歴史科学、196、42-52、査読有

③ 橋本道範、(2009) 日本中世における水辺の環境と生業―河川と湖沼の漁撈から―、史林、92-1、4-35、査読有

④ 橋本道範、(2009)琵琶湖の寺辺殺生禁断論―「現代化」論に向けて―、NEOMAP Interim Report 2008 、Research Institute for Humanity and Nature、

163-169、査読無

〔学会発表〕(計 12 件)

① 橋本道範 (2010 年 12 月 19 日) 日本中世における魚介類消費と漁撈―琵琶湖のフナ属を素材として―, 共同ワークショップ「東アジアの「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相」, 滋賀県立琵琶湖博物館・科学研究費補助金基盤研究 (B)「朝鮮半島の「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相―漢江を中心として」共催, 琵琶湖博物館 (滋賀県草津市), [口頭発表].

② 橋本道範 (2010 年 12 月 17 日) 日本中世における魚介類消費と漁撈―琵琶湖のフナ属を素材として―, 琵琶湖博物館研究セミナー, 琵琶湖博物館, 琵琶湖博物館 (滋賀県草津市), [口頭発表].

③ 橋本道範 (2010 年 9 月 21 日) 日本中世における魚介類消費と漁撈―琵琶湖のフナ属を素材として―, 岡山中世史研究会第 44 回例会, 就実大学・就実短期大学図書館 (岡山県岡山市), [口頭発表].

④ 橋本道範 (2010 年 7 月 22 日) 日本中世における魚介類消費と漁撈秩序―琵琶湖のフナ属を素材として―, 熊本大学大学院教育学研究科社会科合同ゼミ, 熊本大学大学院教育学研究科 (熊本県熊本市), [口頭発表].

⑤ 橋本道範 (2009 年 8 月 21 日) 琵琶湖の寺辺殺生禁断試論―宗教的戒律のつくる景観, 琵琶湖博物館研究セミナー, 琵琶湖博物館, 琵琶湖博物館 (滋賀県草津市), [口頭発表].

⑥ 橋本道範 (2009 年 3 月 13 日) Remarks on the prohibition of hunting and fishing around temples: The cases of Chomei-ji and Ishiyama-dera temples in the Lake Biwa area NEOMAP General Meeting 2009, 総合地球環境学研究所 4-4 プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」, 総合地球環境学研究所 (京都府京都市) [口頭発表].

⑦ 橋本道範 (2008 年 8 月 22 日) 寺辺殺生禁断試論―宗教的タブーのつくる景観―. 総合地球環境学研究所研究プロジェクト４－４「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」第３回景観研究会, 総合地球環境学研究所研究プロジェクト４－４「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」, 大谷婦人会館 (京都府京都市) [口頭発表].

⑧ 橋本道範 (2008 年 4 月 19 日) 日本中世における水辺の環境と生業について―河川と湖沼の漁撈から―. 史学研究会例会, 史学研究会, 京都大学大学院文学研究科・文学部　新館二階　第三講義室 (京都府京都市) [口頭発表].

⑨ 橋本道範 (2008 年 4 月 18 日) 日本中世における水辺の環境と生業について―河川と湖沼の漁撈から―. 琵琶湖博物館研究セミナー, 琵琶湖博物館, 琵琶湖博物館 (滋賀県草津市) [口頭発表].

⑩ 橋本道範(2008 年 3 月 21 日)Prohibition of hunting and fishing around temples : Reorganization of an invisible landscape. NEOMAP 2007 年度第二回全体会議, 総合地球環境学研究所 4-4 プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」, 総合地球環境学研究所(京都府京都市)[口頭発表]

⑪ 橋本道範 (2008 年 3 月 15 日) 環境史の可能性について―佐野報告に対するコメント―. 大阪歴史科学協議会３月例会, 大阪歴史学協議会, 大淀コミュニティセンター (大阪府大阪市) [口頭発表]

⑫ 橋本道範 (2008 年 1 月 13 日) 日本列島内海の中世を基点とする景観の質的変化について―有明海の「現代化」論に向けて. 総合地球環境学研究所研究プロジェクト４－４「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」北部九州ワーキンググループ会議, 総合地球環境学研究所研究プロジェクト４－４「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」, 天理参考館 (奈良県天理市) [口頭発表]

〔図書〕(計 5 件)

① Michinori H ashimoto 、 (in print)Medieval social relationships and Lake Biwa fisheries. LAKE BIWA-Interaction between nature and people, Springer、査読有

② 橋本道範、(2011) 中世前期の堅田漁撈―『賀茂御祖皇太神宮諸国神戸記』所収堅田関係史料の紹介―, 水野章二編『琵琶湖と人の環境史』, 岩田書院, 東京都：125-149. 査読無

③ 橋本道範編、(2010) 琵琶湖博物館研究調査報告第 25 号　日本中世魚介類消費の研究―一五世紀山科家の日記から―,

滋賀県立琵琶湖博物館，草津：pp176．査読無

④　橋本道範、(2010)寺辺殺生禁断試論―宗教的戒律のつくる景観―．内山純蔵・カティ・リンドストロム編『東アジア内海文化圏の景観史と環境　第１巻　水辺の多様性』，昭和堂，京都府：145-169．査読無

⑤　橋本道範、(2009) 平安時代末期・鎌倉時代の邑久．邑久町史編纂委員会編，邑久町史　通史編，瀬戸内市，岡山県：199-240．査読無

〔その他〕
展示
①齊藤慶一・橋本道範、滋賀県立琵琶湖博物館トピック展示、堅田の郷士　居初家（いそめけ）の歴史、2010 年 11 月 23 日～12 月 23 日

②橋本道範、齊藤慶一、滋賀県立琵琶湖博物館トピック展示、移（うつ）ろう大地を把握する―自然のリズムと中世の人々―、2009 年 6 月 23 日～7 月 12 日

６．研究組織
(1)研究代表者
橋本　道範（HASHIMOTO MICHINORI）
滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・主任学芸員
研究者番号：10344342